（公財）広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室報

ひろしまの遺跡

第134号

人と馬の足跡が見つかりました！

―神田（じんでん）遺跡（竹原市）―

水田遺構に残された足跡を調査しています

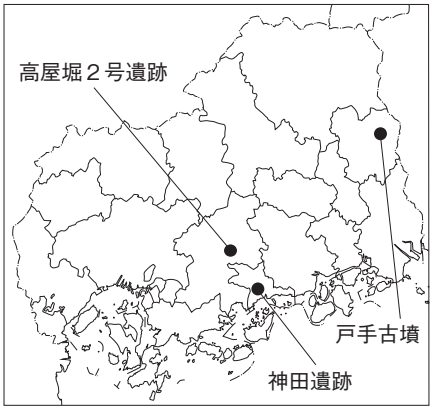
神田遺跡は竹原市新庄町に所在します。遺跡は北東から伸びてくる丘陵と、西側を流れる賀茂川に挟まれた沖積地に立地しています。遺跡から約0.5㎞南には竹原小早川氏の本拠地であった木村城跡（県史跡）があります。令和３年度に行われた中世の城館跡である城ノ本遺跡は木村城跡の西側山裾に立地し、木村城跡との関連が窺えます。また、賀茂川西岸にも手島屋敷跡や墓地など竹原小早川氏に関連する遺跡があります。

発掘調査の結果、調査区（３区）の北東側で段状の高まりを確認し、その南端には石列が並んでいました。石列の基礎には、径50㎝以上の川原石が置かれているものもあり、人為的に設置されたものとおもわれます。

また、南西側には水田と考えられる面が確認され、畔状の高まりにより区画されていました。この面は西から東への高低差が認められ、水路と考えられる溝や暗渠が設置されていることから、上の田から下の田へ水を流す仕組みになっていたと考えられます。この水田からは、500個以上の人の足跡が見つかりました。足跡は昨年度の調査でも確認されています。

さらに、北側の水田からは柵列が確認され、杭の木材が残っていました。

発掘調査速報



① 神田遺跡（竹原市新庄町）

調査期間　令和７年９月１日～12月26日

神田遺跡の発掘調査は、令和６年度に続き一般国道432号（竹原バイパス）道路改良事業に伴い実施しました。調査は、一般国道432号の東に隣接する南北約240ｍ、東西約20ｍの南北に長い範囲で、面積は全体で約3,900㎡です。調査区は大きく３つに分かれ、北から１区、２区、３区としました。昨年度は、１区北、１区南の一部、２区南を、今年度は１区南、２区北、３区を調査しました。今年度の調査面積は約1,500㎡です。なお、１区南～２区北の調査区は遺構面が２面ありました。

１区南の調査区では、昨年度から続く弥生時代の水田跡と考えられる畔状の高まりを確認し、弥生土器が出土しました。この高まりは、南側では後世の削平により消失していました。この削平に伴う面では、石列のほかに土坑２基、礎石１基、ピット21基が確認できました。ピットについては一列に並んでいたことから、柵列であった可能性が考えられます。また、土坑の埋土からは土師質土器が出土しています。この面の遺構は、出土遺物などから中世のものと考えられます。

２区北の調査区では、第２遺構面から馬とおもわれる動物の足跡が確認されました。その下層では、人の足跡が確認されたほか、南側で溝状遺構２基が確認されました。出土遺物などから、中世から近世のものと考えられます。

３区の調査区では、前述のとおり水田とおもわれる耕作面が確認され、出土遺物には土師質土器のほか青磁や白磁などの中国製磁器があることから、中世の遺構であると考えられます。

調査の結果、神田遺跡の遺構は円礫を多く含む砂層の上にあることが確認されました。この層は河川の氾濫によるものと考えられ、遺構のある面の上にも複数回の氾濫による砂の堆積が認められることから、河川の影響を受けやすい立地に人の営みがあったことが明らかとなりました。（恵谷泰典）

遺跡全景（空撮・南から）

２区北　馬の足跡検出状況

足跡のサンプル採取状況

② 戸手古墳（神石郡神石高原町上豊松）

調査期間　令和７年４月10日～５月２日

戸手古墳の発掘調査は、芳井油木線道路改良事業に伴うものです。道路改良工事の範囲内となる古墳の南側の部分と、そこから墳頂部に向かって設定した長さ８ｍ、幅0.5ｍのトレンチ部分の合計38.5㎡を調査しました。

今回の調査範囲ではありませんが、横穴式石室の一部が露出しています。石室は長さ5.6ｍ前後で、地元で産出する石灰岩（石灰質角礫岩）を使用して構築されています。調査では、墳丘の裾を示す傾斜変換点は確認できませんでした。盛土はほとんど失われていますが、地形測量等から径12～13ｍ程度の円墳と推定されます。遺物は調査区西側から須恵器甕胴部の小片が数点出土しました。古墳の時期は、横穴式石室を持ち、須恵器が出土していることなどから６世紀後半と推定されます。芳井油木線沿いは、戸手古墳西側の神石高原町油木にかけて古墳が点在しています。

（岩本芳幸）

戸手古墳全景（空中写真・南西から）

作業風景（北東から）

③ 高屋堀２号遺跡（東広島市高屋町高屋堀）

調査期間　令和７年10月20日～11月28日

高屋堀２号遺跡の発掘調査は、農業競争力強化農地整備事業に伴うものです。調査は２回に分けて実施する予定で、今回が第１次調査に当たります。第２次調査は来年度以降に予定しています。

調査地は丘陵の先端付近に当たります。北東から南西に向かって低くなる傾斜面で、調査前は階段状の水田として整備されていました。調査地の南西側には萩原川が流れています。

調査の結果、中世以降と考えられる柵列跡や柱穴を検出しました。遺物は多くありませんが、青磁などが出土しています。今回検出した遺構は、中世以降の耕作地に関連するものです。このことから、調査地は中世以降に開墾され、現代に至るまで耕作地として営まれ続けてきたと考えています。

遺構の年代も含め、現段階では不確定な部分が多いため、今後さらなる検討が必要です。（森本直人）

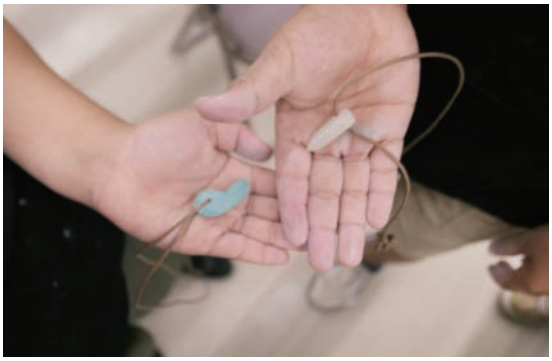
調査前近景（東から）

作業風景（東から）

南観音考古学教室2025

今年度も南観音公民館と共催で、考古学教室を開催しました。毎年大人気の勾玉つくりをまた今年は南観音公民館のロビーで、「埋蔵文化財調査室のおしごと」がテーマのパネル展示を行いました。発掘調査や整理作業の内容をまとめたものですが、公民館を訪れた多くの方が足を止めて見学してくださいました。10月12日にはギャラリートークとして職員が実際に解説を行い、参加者からは質問も多くいただきました。当室に興味を持っていただく機会となったようです。

勾玉つくりのようす



完成した勾玉

公民館でのギャラリートーク

どうする？現代遺物

整理中のプラやビニール

今年度報告書を刊行した鞆港湾施設跡では、雁木などの施設が整備された時期を確認するために、プラスチックやビニール、ジュースの缶などのいわゆる「ゴミ」を持ち帰っています。これらの中には商品名、パッケージデザインなどから販売時期が分かるものがあり、港湾施設の整備や埋め立てがいつ頃行われたのかを示す重要な資料です。

一般的に遺跡から出土する遺物は土器などの焼き物や木製品、金属製品などで、このような素材の資料については、これまでに保管・管理を行っており、知識や経験に即した対応をしています。しかし、プラスチックやビニール製品の保管は当室では初めてで、保管管理のノウハウがありません。プラやビニール製品は放っておくとすぐに劣化してバラバラになってしまうため、状態をよく確認しながら適切な保管方法を探っていきたいと思います。

販売価格 20 円！

令和7年度 ひろしまの遺跡を語る

令和８年１月24日（土）に、広島県立美術館において、令和７年度「ひろしまの遺跡を語る」を開催しました。当事業団職員による今年度調査した遺跡の調査報告２本と、平成29年度から令和７年度にかけて調査を行った鞆港湾施設跡の成果をまとめた調査報告と、それに関連した参考事例報告のあわせて４本の報告を行いました。当日は寒い中、105名の参加者がありました。

当日の様子

令和７年度埋蔵文化財取扱技術研修会

広島県教育委員会からの委託を受けて、県内の市町の文化財担当者を対象とした研修を行いました。

日程	講習名	開催地	参加人数
令和７年11月19・20日	発掘調査実習課程	神田遺跡（竹原市）	５名
令和８年２月３・４日	整理・報告書作成課程	（公財）広島県教育事業団 埋蔵文化財調査室	６名

発掘調査実習課程

整理・報告書作成課程

考古学アラカルト62

古墳時代の耳環

耳環（じかん）とは、環状の金属製耳飾り（イヤリング）です。大きさは、径３㎝程度のものが一般的です。古墳時代では、後期（６世紀～７世紀前半）の古墳から出土します。広島県では金色に輝く耳環が多く見つかっています。

一見、耳環は金属の細い棒を環状に曲げただけの単純な作りに見えます。しかし、実際には様々な製作方法が存在します。

三次市 見尾山第１号古墳（６世紀後半）　耳環

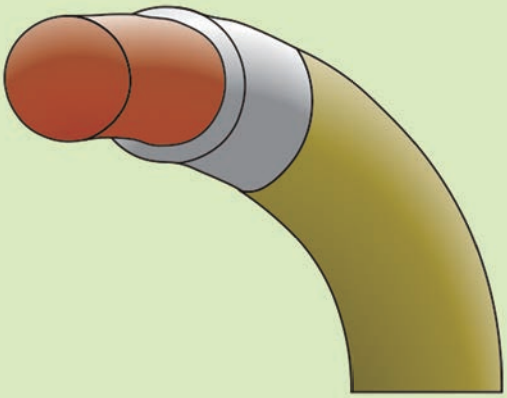
銅芯＋銀箔＋金めっきの耳環

棒状に加工した銅芯（どうしん）に銀箔（ぎんぱく）を巻き、さらに金アマルガム法で金めっきを施しています。金アマルガムとは、水銀と金を混ぜたものです。これを物体に塗って火をかざすと、水銀が先に蒸発し、金だけが表面に残ります。古墳時代にはこの方法で金めっきが施されていました。現在では、水銀が人体にとって有害であることから、許可された場所以外での水銀の使用は禁止されています。

右の写真は、銅芯＋銀箔＋金めっきの耳環と考えられる一例です。長い年月によって青緑色に変化した銅芯と銀箔が部分的に残っています。よく見ると、金めっきの一部が剥がれて銀箔が露出しています。

製作方法をより明らかにする方法として、耳環の成分分析があります。府中市の矢谷第４号古墳（６世紀後半～７世紀前半）から出土した耳環は成分分析が行われています。分析の結果、金・銀・銅・水銀が検出されました。このことから、銅芯＋銀箔＋金めっきの耳環と考えられます。

三次市 見尾山第１号古墳（６世紀後半）　耳環
金めっきの一部が剥がれた銀箔



模式図　銅芯＋銀箔＋金めっきの耳環
（渡辺 2018 を基に作成）

銅管＋金めっき（または金箔）の耳環

薄く伸ばした銅板（どうばん）を丸めて、銀蝋（ぎんろう）などで接着し、銅管（どうかん）を作ります。そして、その銅管に金めっきを施す、または金箔（きんぱく）を巻くなど、様々な製作方法があります。中が空洞になっていることから、中空（ちゅうくう）の耳環と呼ばれます。

右の写真は、銅管＋金めっきと考えられる耳環です。銅管は欠損しており、中が空洞であることがわかります。また、銅管の内側では、銅板を丸めて接着した際の継ぎ目が観察できます。

三次市 札場古墳（６世紀後半～７世紀前半）　耳環

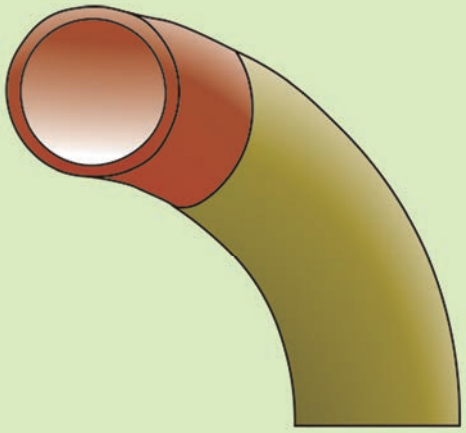
耳環が教えてくれること

耳環は径３㎝程度の小さなものですが、その製作方法は複雑で、古墳時代には高度な金工技術があったことを教えてくれます。このような複雑な製作方法が採用されたのは、金などの貴重な金属素材を節約するためでしょうか。

また、様々な耳環があるということは、所有者の地位・出自・職能などによって入手できる耳環が違ったのかもしれません。もしくは生産・流通ルートの違いかもしれません。いずれにせよ、耳環には古墳時代を探る手がかりが秘められています。

今回紹介したもの以外にも、様々な製作方法の耳環があります。広島県内では見つかっていませんが、純金の耳環もあります。展示会などで耳環を見つけた際には、じっくり観察してみてください。（森本直人）

三次市 札場古墳（６世紀後半～７世紀前半）　耳環
耳環の内側、丸めた銅板の継ぎ目



模式図　銅管＋金めっきの耳環
（渡辺 2018 を基に作成）

参考文献

西山めぐみ 2000「古墳時代耳環考－福岡平野出土耳環の材質・製作技法について」『古文化談叢』第44集　九州古文化研究会

渡辺智恵美 1997「耳環小考－製作技法、材質からみた分類－」『元興寺文化財研究所創立三十周年記念誌』 元興寺文化財研究所

渡辺智恵美 2018「Ｘ線CTスキャンと三次元計測データを利用した耳環の調査－セット関係特定のための新手法の試み－」『史学論叢』48　別府大学史学研究会

お知らせ

令和７年度刊行物のご案内

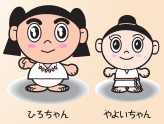
令和７年度は４冊の調査報告書を刊行します。頒布は令和８年４月１日より行います。ご希望の方は当室までご連絡ください。

	書　　名	市町名	概　　要	頒価
埋文報告第99集	横田１号遺跡（第１・２次調査）・福原南遺跡・福原２号遺跡（第２次調査）	東広島市	【横田１号遺跡】　第１次調査では弥生時代後期～古墳時代初頭を主体とする多数の竪穴建物跡を検出した。 第２次調査では弥生時代前期の遺構（竪穴建物跡１軒など）を多数検出した。特に、弥生時代前期の竪穴建物跡は西条盆地、さらには広島県内においても貴重な事例である。過去の調査で弥生時代後期～古墳時代初頭の大規模集落跡と評価されており、今回の調査でその集落跡がさらに広がることを確認できた。 【福原南遺跡】　調査では中世を主体とする遺構を検出した。主な遺構として、掘立柱建物跡４棟や竪穴状の性格不明遺構を検出している。 【福原２号遺跡】　弥生時代から近現代に至るまでの各時代の遺構を検出した。特に、弥生時代中期後葉の竪穴建物跡は残りが良く、西条盆地における弥生時代の暮らしを考えるうえで貴重な調査事例となった。	2,200円（送料別）
埋文報告第100集	鞆港湾施設跡	福山市	鞆港湾施設跡は、港湾施設を構成する主要な要素（雁木・波止・常夜燈・焚場跡・船番所跡）をすべて備えている国内で唯一の遺跡である。 調査の結果、雁木の基礎には雁木を支える石垣が設置してあることが初めて確認されたほか、地中部分に埋もれていた船繋石の文字も明らかにすることができた。また、新たな船繋石の存在などにより、後世の雁木増築工事以前の状況についても明らかにすることができた。 東雁木２次調査では、写真資料等でしか見ることができない荷揚場建物の遺構として基礎となる礎石を多数確認することができた。	2,600円（送料別）
埋文報告第101集	灰塚第８～11号古墳・石見銀山街道	世羅郡世羅町	【灰塚第８～11号古墳】　灰塚古墳群は丘陵頂部に築造された合計11基の古墳群である。そのうち、第８～11号古墳の発掘調査を行った。いずれも円墳で、第８号～第10号古墳では遺構は確認できなかった。第11号古墳では埋葬施設を１基検出した。撹乱を受けた盛土内から鉄剣や鉄鏃、古銭、弥生土器が出土した。遺物や埋葬施設などから、第11号古墳は５世紀中葉ごろに築造されたと考えられ、第８～10号古墳も近接する時期であると考えられる。 【石見銀山街道】　石見銀山街道は、尾道から甲山を通り、三次を経て、石見へ至る街道である。特に、江戸時代に石見銀山で生産された灰吹銀を輸送するために用いられた。調査では、切通し部と切土部を発掘し、道幅が切通し部で約2.2ｍ、切土部で約2.9ｍであることを確認した。	500円（送料別）
埋文報告第102集	戸手古墳	神石郡神石高原町	戸手古墳は北から南に延びる尾根の先端付近に立地する。今回の調査範囲ではないが、横穴式石室の一部が露出している。地元で産出する石灰質角礫岩を使用して構築しており、規模は長さ5.6ｍ前後、奥壁付近の幅が約１ｍである。調査範囲内では墳丘の盛土等は確認できなかったが、須恵器片が出土した。	400円（送料別）

あとがき

おおむね年に２回刊行している調査室報ですが、今年度は発掘が下半期に行われ、調査期間も短かったため、１号だけの刊行となりました。

2003年に公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が設置され、第１集の報告書を刊行してから、今年度で第100集を超えました。今後も、県内各地の調査成果を様々な形でお伝えしていきます。



（公財）広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室報
ひろしまの遺跡　第134号

発行日　令和８年３月23日
編　集　（公財）広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036　広島市西区観音新町４-８-９
TEL(082)295-5751　FAX(082)291-3951
ホームページ　https://www.harc.or.jp/
E-mail　maibun@harc.or.jp
発　行　（公財）広島県教育事業団
印　刷　株式会社ニシキコネクト